

「布施」がもたらした 執着からの解放。

神戸教会 Aさん

Aさんの夫はある朝、自宅の寢室で倒れ救急搬送された。診断は脳幹出血。人工呼吸器などの医療機器が体に取付けられて意識の戻らない夫。不安はどこまでも広がっていった。そんなとき、仏教を共に学ぶ仲間から布施を勧められる。夫が倒れて収入が絶たれ、二人の子どもとの生活費、学費があり、それどころではないという気持ちだったが、自分の心に問いかけた。夫は回復するのか、このままなのか——まだ見ぬ将来をいくら思い煩ったところで解決しない。ならば、そうした執着から解放される「何か」をつかみたいと感じ、仲間に浄財を託した。「いまを大切にしましょう」と、かけられた言葉を胸に刻んだ。すると、夫の容態で一喜一憂することは少なくなったという。「『いま』を精いっぱい生きる」という教えに立ち返ることを忘れなければ、感情に流されることはない信じている。「私の名前を呼んでほしい…」Aさんはその願いを胸に、今日も夫のもとへ向かう。



お金を貯める。お金を使う ——布施②

世間で布施といえば寺社や教団にお金を寄進することとの印象も強く、その財施や財についての考え方も、本来の意味とは異なる誤解があるような気がします。仏教における財について、ある仏教学者は「一般に俗信者に対しては、むしろ積極的に現世的な財を尊重すべきと説かれている」「財の集積は、人生の望ましい目的の一つと考えられている」と述べています。禁欲的に思われがちな仏教の世界においても、利益を追求したり、財を蓄えたりすることは慎むべき行為ではなく、むしろ生きがいにもつながる積極的な生き方として評価されるというのです。それはなぜかというところ、「蓄えた財によって、人びとに福利をわかち与えることをめざす」からです。

仏教では「財を得ては多くの人びとのために恵む人」が称賛されて、もの惜しみの心を捨ててわかちあうこととの大切さが強調されているのです。どれほど富を得て、財を蓄えても、その財を「自分ひとりを持つていたのでは死んでしまう。それを『布き施す』ことで財が生きる、それが「布施」本来の意味だといわれます。

立正佼成会